

心房細動と認知症リスクに関連

過去の研究において、心房細動と認知機能の低下および認知症との関連が示唆されている。しかし、それらの研究は追跡期間が短かったり、ほとんどが白人を対象にしているなど選択された集団に基づいているものであったり、また認知機能の減衰については考慮されていないものであった。本研究では、減衰も考慮した認知機能の20年間の変化および認知症発症と心房細動との関連について検討した。

ARIC研究(動脈硬化症に関する研究)の参加者12,515例(平均年齢56.9歳、女性56%、黒人24%)の1990~1992年から2011~2013年までのデータを分析した。心房細動の発症は心電図検査と退院コードにより確認した。認知テストは1990~1992年、1996~1998年、2011~2013年に実施し、認知症発症は臨床医が診断した。結果、20年間に2,106例が心房細動を発症し、1,157例が認知症を発症した。認知症スコアの20年間における低下の平均は、虚血性脳卒中などの心臓血管リスク因子を調整後、心房細動がない人より心房細動のある人の方が大きかった。また、心房細動の発症は認知症リスクの上昇と関連がみられ、虚血性脳卒中などの心臓血管リスク因子を調整後のハザード比は1.23であった。

したがって、心房細動は認知機能のより大きな低下や認知症リスクの増加と関連することが示された。認知機能低下は認知症の前段階であるため、心房細動患者の認知機能の低下を遅くし、認知症を予防する心房細動の治療法を確立するためのさらなる研究が待たれる。

出典 : Journal of the American Heart Association. 2018 Mar 07; 7(6): pii: e007301